

Editor's eye

・特集・

コロナワクチンと皮膚病

編集担当 浅井 俊弥

新型コロナウイルスワクチンは、2021年2月に最前線の医療従事者から先行接種が始まり、その後接種対象者を拡大、これまでに国民の80%が2回目までの接種を受けている。すでに3回目、4回目の追加接種が完了し、現在はBA.4.5に対応した2価ワクチンによる追加接種が行われている。

ファイザー社製およびモデルナ社製のワクチンは人類が初めて公的に使用するmRNAワクチンであった。含有するPEGに対する即時型アレルギーの懸念のほか、どのような副反応が生じるのか、手探りの状況であったといえる。接種の進捗とともに、日本皮膚科学会の地方会等で、新型コロナワクチン接種に関連した皮膚疾患の発症、増悪の症例が報告されるようになり、それらを集積したのが本号の特徴である。

足立は院内の感染対策およびアナフィラキシー予防の観点から、プリックテストを用いた即時型反応の調査を行った(「検査」)。即時型反応が関与したと考えられる死亡例もわずかながら認められることから、接種を進めていくうえで参考になる論文である。

症例の報告もたいへん興味深く、ワクチンに対する過敏反応と考えられる薬剤過敏症症候群、多形紅斑、ジベル型中毒疹、水疱、GVHD、血管炎、多形慢性痒疹などの症例が集積された。また、ワクチン接種によって(自己)免疫になんらかの変化をもたらした結果としての、円形脱毛症の発症、乾癬の増悪ないし膿疱化、扁平疣贅の消褪など、症状が多岐にわたることが示された。

本号は、ワクチン接種に携わるすべての医療関係者に対して、ワクチン接種後の副反応に関する有用な情報を皮膚科医の視点で発出できたと思われる。ぜひ参考にしていただきたい。